

11 脊髄損傷退院患者の職場復帰に影響をおよぼす因子の後方視的調査

-職場復帰と地域社会の移動の関連性に着目して-

病院 リハビリテーション部 島袋尚紀、愛知諒、市川眞由美、清水健

【はじめに】

脊髄損傷 (SCI) は、他疾患に比して 15-64 歳までの生産年齢人口の割合の高さや認知機能が正常であることから、SCI への復職支援は重要であると考えられる。一方、Yuh らは、SCI の職場復帰 (以下、復職) について、公共交通機関利用や自動車運転などの地域社会の移動が可能な場合は高い復職の機会を得ていると報告している。しかし、対象の SCI は受傷経過年数が長いため、当院入院中の SCI 患者の状況とは乖離がある。そこで本発表の目的は、SCI 患者の退院時点での復職と地域社会の移動との関連性を検討することである。

【方法】

研究デザインは後ろ向きの横断研究であり、データは当院の診療録より集積した。対象は、2019 年 1 月～2023 年 12 月までに退院した SCI 退院患者のうち、年齢が 15 歳未満の者やデータ欠損者を除外した 231 名とした。調査項目は、①基本情報として受傷時年齢、性別を、②社会経済学情報として婚姻歴の有無、教育歴、持ち家の有無、住居地域、受傷前の保健情報、受傷前の職業を、③医学的情報として受傷経過日数、損傷高位、重症度 (AIS)、日常生活自立度 (FIM 運動、FIM 認知) を、④地域移動情報として屋外移動の自立度、自動車運転の自立度とした。メインアウトカムは退院時の復職者および復職予定者と定義し、復職者と地域移動の自立度の関連を検討するために、復職の可否を従属変数、地域移動の自立度を独立変数とする二項ロジスティック回帰分析を用いオッズ比を算出した。また、地域移動の自立度が他の因子とは独立した復職の要因になるのかを検討するために、年齢、性別、婚姻歴、損傷高位・重症度、地域情報を調整した多変量オッズ比を推定した。解析には SPSS Ver. 25 を用い、有意水準は 5%とした。

【結果】

対象者は、平均年齢は 49.7 歳で生産年齢人口の割合は 162 名 (70.1%)、頸髄損傷が 166 名 (71.9%)、胸腰髄損傷が 65 名 (28.1%) であった。また、復職者は 36 名 (15.6%)、地域移動の自立者は復職者が 28 名 (77.8%) で非復職者が 66 名 (33.8%) であった。二項ロジスティック回帰分析の結果、復職に対する多変量調整は、地域移動の自立度がオッズ比 8.336 (95%信頼区間 2.858-24.317、 $P<0.001$) であった。

【考察】

先行研究では、本邦の SCI の生産年齢人口は 49.4%と報告しているが、当院の SCI 患者は 69.0%と割合が高く、復職支援の意義は高いと考えられる。また、SCI の退院患者では、復職の可否と地域の移動自立度の間に有意な関連が認められた。